

『大阪毎日新聞』 昭和九年四月十一日 「家庭と學藝」欄

「恒友忌」

中川一政

森田さんが亡くなって一年になる。四月八日はお釈迦様の日だが、われ／＼には恒友忌つねともぎなのである。われ／＼は森田さんの遺作を今年の春陽展に並べるが、この間皆で御墓詣りに行つた。墓の側面にはかう刻んである。

弘潤院謙山恒徳居士

行年 五十三歳

昭和八年四月八日

「埼玉県大里郡玉井村大字久保島 森田彦三郎 三男に生れ、画を業とす大正三年欧州に遊び歸來技益進み近年好みて淡墨平遠の風景を作る 觀者讚嘆して新南画と云ふ 遺言に由りて骨を分ち此地に埋葬す

知友 芋錢子記す

◇

大正三年に私は摂津の芦屋にゐたが三島丸の司厨長から手紙が来て、私は神戸へ逢ひに行つた。その司厨長は私に油絵具を英国から買つて来てくれたのであつた。

司厨長は森田さんの室を見せてくれたが、トランクが重なつてゐるだけ

であつた。森田さんはその船で欧州へ行き、私はその油絵具で絵を描き出したのである。

◇

芋錢さんと森田さんとは十二違ふ。森田さんと私とも十二違ふ。芋錢さんは見下してその死を悼み、私は見上げて森田さんの死を悲しんでゐるのである。

春陽会が創立される時に私を呼んでくれたのはこの未見の森田さんである。私の画生活に森田さんを知らせてくれた運命に私は感謝。それだけに森田さんの死は私の身に沁みる。

◇

森田さんの病氣は癌であつたが、まだ死ぬ人ではなかつたのである。病氣といふより不慮の災難が命を奪つたのである。

森田さんは一見弱さうに見えた。

そして、その描く画も何の珍奇もなく平凡なもののように見える。しかし不思議なことには、それが私にはだん／＼強く見えて来たのである。

私は心ひそかに森田さんを稽古台にしてゐたのである。この人なら自分の力をセーブする必要もなく、思ひ切りぶつかることが出来る。

森田さんの晩年の仕事、田園和楽や山村煙霧などの大作は現役の仕事である。決して精進なしに出来る仕事ではない。

森田さんは自作の前に立つて、「老人になつてから絵が密になつた」と笑ひながらいつたが、ますますエネルギーを籠め、難行道に筆を進めて行つ

たことは尊敬しなければならない。

◇

森田さんの滞欧作品には多分にセザンヌの影響が見える。

思ふに油絵といふものは森田さんの性情には余程にが手であつたと見える。

油絵といふものは色彩を尚たっぶ。

光線を尚ぶ。

形を尚ぶ。

塗ることを尚ぶ。

森田さんはさういふ敵と戦つて力を養つて来たのである。「歸來技益進み」といふ芋銭さんの文章は本当である。森田さんは一流を編みだしたのである。水墨乾墨の仕事がそれである。

森田さんの仕事は日本画に復帰したのではない。森田さんは画をも味方にしなかつたのである。されば他人が、「いま日本画を描いてをられますか」といふ時に、「水墨を描いてみます」と潔癖にもいふのを常としてゐた。

◇

森田さんの編み出した流儀は矢張油絵と戦はねば出来なかつたものである。平遠へいえんといふが矢張遠近法の洗礼を経た平遠である。

光線といひ形といひ塗ることといひ、森田さんの流儀においてどういふ

風に処理されたか、それは晩年の作品を見ればよくわかる。一朝一夕の仕事ではなかつたと思ふ。

◇

千葉の病院から森田さんの亡骸と一緒に帰つて来たトランクからは、自分の葬式の指図を書いたもの、作品行先の心覚えなどが出て来たが、われ／＼に対しては、森田さんは癒なおつて仕事をすることを話してゐたのである。帰らぬことながら残念でならない。

『大阪毎日新聞』 昭和九年四月十一日

\*芋銭 小川芋銭（おがわうせん、一八六八—一九三八）

本名…小川茂吉。本多錦吉郎に洋画を学び、独学で日本画を習得。『朝野新聞』などに挿絵や漫画を描く。茨城県牛久に移り住み、院展を中心に活動。河童（かっぱ）の絵で知られる。